

横田

YOKOTA



プロフィール

戦前の横田地域は、起伏のある丘で土質が国頭マージにあたり、イジュ・ギーマ・テンニンカ・ノボタンといった中低木が生えていました。小高い丘で見晴らしがよく、船旅のおりには旅送りが行われていました。また、この地域はヤマタイモと呼ばれ、山の管理人、山当(ヤマタイ)が詰めていたようです。山当とは、王府時代に村掟の下におかれた役人で、読谷山間切の総山当の指揮監督をうけ、担当村の柚山(官有林)の保護育成に務めました。日頃から山林を巡視し、討伐の有無を監視、毎月一日・十五日の二度ずつ喜名番所に報告しなければなりません。一八九三年(明治二六)に編纂された「琉球旧慣地方制度」によると読谷山間切には一六人の山当が配置されていたことが知られます。

戦後は養鶏場や読谷ハイランドとして整備されますが、整備前は喜名小学校低学年の格好の遠足の場となっていたことが知られています。

横田自治会は、二〇一四年四月に読谷村公民館連絡協議会の一員として加盟した村内でも最も新しい自治会です。一九八八年、座喜味の振興集宅地、親志ハイランド(面積七六四八㎡)と読谷ニューハイランド(面積二万六三三〇㎡)の隣接する両自治会が合



敬老会

併し、横田自治会が誕生、宅地開発のなかでは公園などが整備されています。

横田はもともとの読谷村出身者は少なく、全国各地からの移住者で構成されています。まさにチャンプルー地域。「自分たちの地域は自分たちで創る」ことを合言葉に、コミュニケーションを大切にする住み良い地域づくりが取り組まれています。夏祭り、敬老祝賀会、餅つき等の自治会レクリエーションのほか、地域美化活動が活発に行われ、「横田に住んでよかった」と思えるように一人ひとりが自分にできることで参加し、より住み良い地域をめざしています。



夏祭り



公園

OSOE



プロフィール

民間の住宅団地が集中して開発されたことにともない、新しい住宅地に大添として誕生しました。入居が同時代であったことから、同じような年齢構成になっているのが特長です。団地内開発のなかで雨水浸透池、公園などが整備されています。

歴史は浅いものの同年代の居住者が多いということから、結束力と自立性に富んでいます。村内では団地開発地区におけるコミュニティアとして注目されています。新住民のコミュニティのあり方についての方向性を示す事例でもあります。地域の問題を自ら解決するという住民自治のあり方や、独自の地域文化を模索しています。手作り公民館建設事業を契機に、創意工夫するコミュニティづくりをめざしています。



大添公民館(1998年建設)



安住の地碑

安住の地 大添

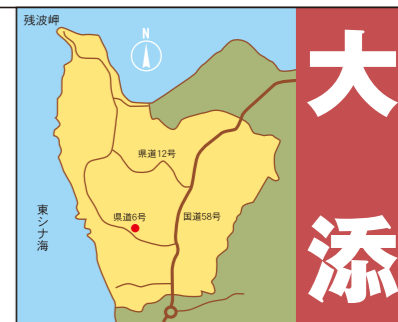
大添にはいろいろな地域から人々に移り住み、「この地により良き暮らしをうち建て、区民一人一人が主役となって共にかんばろう」との思いを掲げ、一九八五年に大添区自治会を結成しました。二〇一五年、自治会結成三〇周年の節目を迎え、大添は住民参加の手作り公民館建設が特徴するように、常に住民主体のまちづくりがなされてきました。安住の地、すなわちこの地が安心、安全に住める地域社会の建設をめざし、子どもの見守りや高齢者、障がい者の地域支え合い、自主防災活動や防犯パトロール等に取り組んできました。活動はすべて住民の自主で行われ、これが「安住の地」を具現化することや住民の社会参加につながり、地域コミュニティの核となっています。



防犯パトロール



伝統芸能「安住の地」



大添